保育計画(新規事業計画)成果報告書

法人名等	社会福祉法人　裕愛会
施設名	中央こども園
報告者（役職）	髙﨑　秀樹（園長）
住所・連絡先	宮崎県日南市中央通１丁目 1-8
	☎　0987-23-0220 E-mail　hihi.0614ky@gmal.com

○タイトル（保育計画 or 新規事業計画）

元気いっぱい！　笑顔あふれる遊びと成長の舞台

○主な助成備品

巧技台、収納台車

１．保育計画(新規事業計画)策定の目的

巧技台を使用するサーキット遊びで生まれるものは、【体力・運動能力の向上】　体力は人間の活動の源であり、人が生きていくために重要なものである。特に幼児期は、神経機能の発達が著しく、幼児期に運動を調整する能力を高めておくことは、児童期以降の運動機能の基礎を形成するという重要な意味を持っている。【健康的な身体の育成】運動習慣を身につけると、身体の諸機能における発達が促されることにより、生涯にわたる健康的で活動的な生活習慣の形成にも役立つ可能性が強い。【意欲的な心の育成】思い切り伸び伸びと動くことは、健やかな心の育ちも促す効果がある。身体を活発に動かす機会を増やすことは、何事にも意欲的に取り組む態度を養う。【社会適応力の発達】幼児期には、徐々に多くの友達と群れて遊ぶことができるようになっていく。その中で協調する社会性を養うことができる。【認知的能力の発達】幼児が自分たちの遊びに合わせてルールを変化させたり、新しい遊びを質的に変化させていこうとすることは、豊かな創造力も生むことにもつながる。以上のことで身体だけではなく、心や学びの基礎も育て、今、経験していることが礎となって成長してもらいたいと考える。

２．具体的な実施内容

【0 歳児】

巧技台の傾斜面やすべり面を使用し、傾斜面ではハイハイをしたり、バランスを取りながら座ったり、保育者に手を引かれて登ったりしながら楽しんでいた。この時期は、「上手くなる」ことよりも、身体を動かすことを楽しむことを優先し、「楽しむ気持ち」を育むことを優先する。「楽しむ気持ち」は子どもの興味や気持ちに共感することで育まれる。

声をかけ、アイコンタクトを取りながら子どもの動きを助けるような関わり方を中心に取り入れた。また、定期的に巧技台を使った遊びを取り入れているので、皆、上手に手足を使い登ったり・下りたり・滑ったりできるようになってきた。

【1・2 歳児】

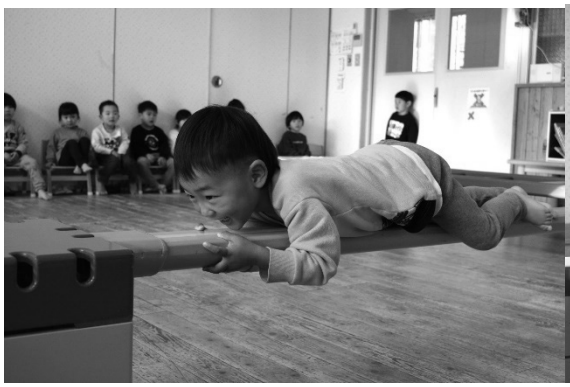
傾斜板は四つん這いで登り、手足の力の入れ具合を感じながら登っていた。グリップのように掴むものがないため手足に力を入れなければ滑るので、子どもたちは手指や足の指に力を入れて前に進んでいる。すべり台は、つかむ動作、しゃがむ動作、登る動作を行いながら高低差の体験もしている。すべり台で遊ぶには、「順番を待つ」「前の人が滑り終えてから滑り出す」などのルールがあるが、1 歳児はまだ理解が難しいので「階段から順番で遊ぼうね」などと声をかけ誘導している。

『1 歳児』

『2 歳児』

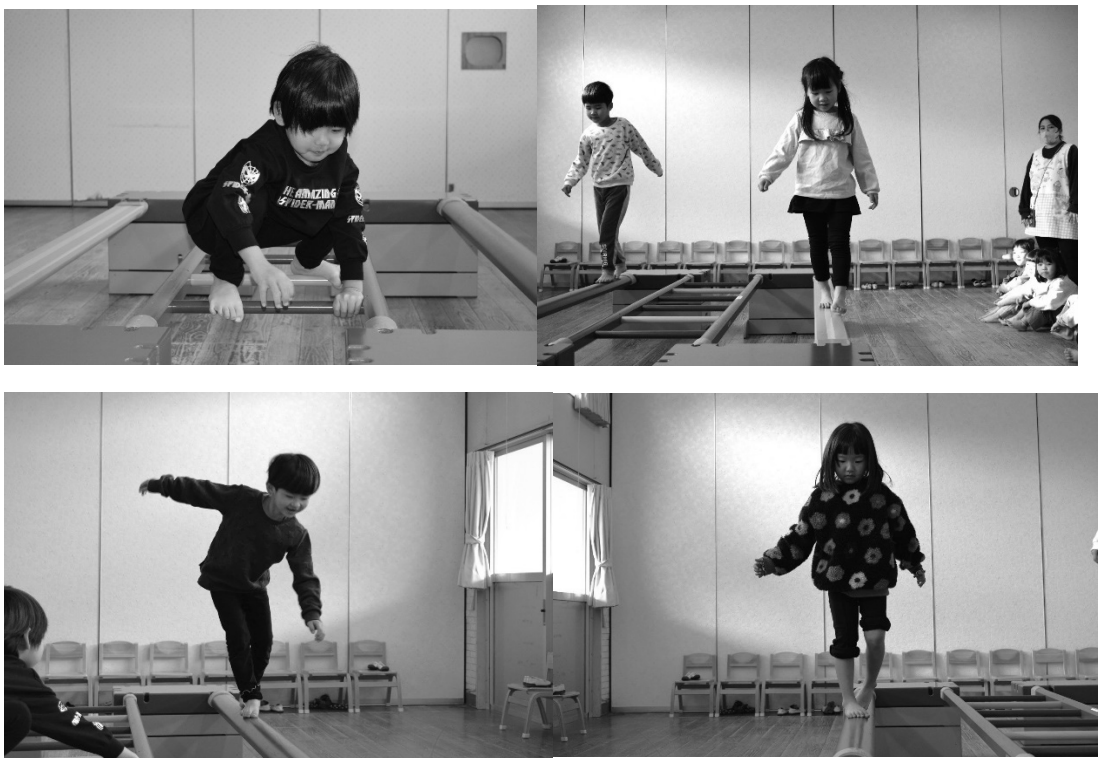
【3 歳児】

はしご渡りでは、高這いで手足を同側や交差で渡りきることで、姿勢の安定性の向上や体幹が鍛えられている。はしごを進む時には、手足の協調性が必要なので、四肢を同時に意識して進まないといけないため、皆真剣な顔で取り組んでいる。腹這いで平均台を渡るには、体のバランスをとると同時に手指と足の指に力を入れて、体を前に運ぶ動作も必要になるため、体幹を鍛えるにはとても良い運動であると感じている。



【4 歳児】

平均台では、体幹やバランス感覚が必要である。面が平らなものと湾曲しているものがあるが、平らなものではバランスをあまり崩さずスムーズに渡れる子どもが多いが、湾曲しているものではバランスをとることが難しく途中で落ちたり、渡りきるまでに時間を要す子どもが少数であるがいる。体幹は、「体の幹となる部分」なので、体幹を鍛えると姿勢の安定やバランス感覚の向上を促している。



【5 歳児】

サーキット（３６０度周回できるような）コースの環境を設定する。進めるコースを複数作ることで、自分で選択する楽しみが生まれる。また、方向を決めずに遊んでも複雑さが増し、さらに楽しめる。さらに、アイランド型（中央から３６０度広がるような）コースの環境を構成し、公園の複合遊具のように好きな所から登ったり下りたり遊ぶことで、子どもたちの創造力を掻き立てる工夫をしている。

３．その成果と評価

巧技台を使用することで、年長クラスでは鉄棒やマット運動も組み入れて、より複合的に遊びの可能性がひろがった。子どものドキドキ・ワクワクする気持ちが自信に繋がっていると感じる。また、巧技台の遊び方を覚えながら、皆で楽しく遊ぶにはどうしたら良いかを保育者と一緒に話し合った。保育者が一方的にルールを決めるのではなく、子どもたち同士が、どうしたら楽しく遊べるかを自然に考え行っていたことに成長を感じた。

そして、友達や保育者との運動遊びでは、お互いに汗をかき、笑い、はしゃぎ、自然と身体も温まるので、一緒に身体を動かすことで、心のコミュニケーションもとれて、より良い人間関係が育まれた。運動遊びを通じて心加減と力加減を学べたと思う。

乳児は「立つ」「座る」「歩く」、幼児は「登る」「飛ぶ」「くぐる」「転がる」「渡る」「跳ねる」など、これらの基本動作が助成していただいた巧技台により体力の向上が推進された。

４．今後の課題と展望

本園は以前より「リズム遊び」を通して子どもの発達を促し、音楽的な要素を理解する力が養われ、運動能力の発達や身体的なコントロールやバランス感覚を養ってきたが、それだけでは、子どもたちの心身の発達には不十分であった。巧技台を助成していただいたことで、子どもたちの総合的な心身の発達の向上に大きな一助となった。

巧技台のサーキットバリエーションは豊富であるため、今以上にコースの環境を構成することで、自分で選択する楽しみを増やしたり、子どもの創造力を掻き立てる工夫をしていきたいと思う。

以上